

***** シンポジウム報告 *****

ミニ・シンポジウム「先住民族アイヌの現在」2009年1月31日(相山女学園大学)

主催:愛知県立大学多文化共生研究所、中部人類学談話会

先住民族サミットの成果およびアイヌ民族の現状と今後

「萱野茂 二風谷アイヌ資料館」館長

萱野志朗氏

今見ていただいたDVDのタイトルは『イランカラテ こんにちはアイヌ文化』(制作:財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構)です。これは財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構という機関が制作したアイヌ文化啓発用DVDです。実は私は啓発ビデオ制作委員会の委員の一人として関わっています。日本列島にいる日本人は、未だにアイヌ民族は野山を駆け巡り、クマやシカをハンティングし、そして鮭を捕って食べているという誤った情報が、今でも伝わっているわけです。その時に考えたのは、そういう誤った情報をただ啓発用ビデオあるいはDVDが必要だということでした。

先ほどDVDの中にも出ていましたが、私が館長を務めている「萱野茂二風谷アイヌ資料館」の屋外の施設であるチセ(アイヌの伝統的な家屋)があります。あのカヤ葺きの建物を見ると、夏場によく本州から来るお客さんの中には、「やっとアイヌの村にたどり着いた」と喜ぶわけです。これは嘘ではありません。本当の話です。「やっとアイヌの村に来たな」と感激するのです。これは普通に考えると、実際には今は住居として使われていないと分かるはずですが。火も焚かれていませんからチセ(家)からは煙も出ていません。100年以上も前に

使われていたチセ(家)を昔通りに復元してあるだけなのです。

このような誤解を笑えないくらい、一般国民のアイヌ民族に対する理解度は低いのです。DVDを見ていただくと分かりますが、アイヌの若い女性がパソコンを使ってデザインをしているとか、子どもたちがゲーム機を使って遊んでいる、あれがまさにアイヌの今日の姿なのです。しかし、それが充分伝わっていないことが一番問題だと言えると思います。

それで、「先住民族サミット」アイヌモシリ2008の方をちょっとおさらいしておきます。昨年(2008)の7月1日から4日にかけて行いました。私が書いた『二風谷アイヌ教室』広報紙第88号の『「先住民族サミット」アイヌモシリ2008を振り返って』の中では、4日間で延べ1500人と書いています。そして、グループ“シサムをめざして”の報告書の方には1850人と書かれています。どちらの数字が正しいのか、ちゃんとカウントしていないのですが、私も1500人くらい来たのではないかと。数字については多少の誤差はありますが、この4日間を通してどういうことが起こったか、というお話をします。

まず一つ、北海道で昨年「G8サミット」

が行われて、洞爺湖のすぐ上にザ・ウィンザーホテルというお城のようなホテルがあり、そこが G8 サミットの会場になりました。現在、そのホテルは観光スポットの一つになっています。1泊最低でも3万5千円から4万円で、もっと高い部屋は10万円以上するホテルのようです。サミットが始まる直前にはそのホテルへ食事に行くツアーなどが企画され観光客が集中しました。「G8 サミット」が終わった後も少しは集客力あったと聞いています。しかし、洞爺湖畔や登別温泉などの観光地では、この G8 サミットが開催されたことによって様々な影響を受けました。ひとつは観光客が全く来なくなったことです。G8 サミットが始まる1か月前から警備と称して通行車両をいちいち検問しました。1回通るだけでも免許証を見せろと言われ、普通のお客さんが全く来なくなったのです。洞爺湖畔温泉ホテルはかなりの打撃を受け収入減となったのです。「G8 サミット」が開催されたことによる悪い影響の一つと言えるでしょう。

北海道で「G8 サミット」が行われるということを知り、北海道で「G8 サミット」が行われるのであれば、「先住民族サミット」というものを開いてもいいのではないか、ということ考えたのです。これを開催するに当たり、一番何が問題だったかというと、社団法人北海道ウタリ協会というアイヌの組織があります。本来であればアイヌの組織である北海道ウタリ協会が主導権を取って「先住民族サミット」を開催すれば本当は良かったのです。

稲村先生が撮影したビデオを先ほどご覧いただきました。その中でヴィクトリア・タウリ・コープスさんに基調講演をしてい

ただきました。このヴィクトリア・タウリ・コープスさんは「先住民族の権利に関する国際連合宣言」を作った時に議長を務めた方で、非常に先住民族の人権に詳しい方なのです。現在も「国際先住民族問題に関する常設フォーラム」の議長を務めていらっしゃいます。実は、北海道ウタリ協会の幹部宛にヴィクトリアさんは『2008年に「G8 サミット」が北海道で行われるので、先住民族の会議を開催したいですね』と言っていたらしいのです。私は知らなかったのですが、これは後で聞いた話なのです。結局そういう提案があったけれども、北海道ウタリ協会は自己資金というものがほとんどなく、会員から集める会費と、あとの運営予算は国と北海道が半分ずつ出して、そのお金で運営しているのです。ですから同協会の判断で自由に使えるお金は1円もないのです。すべての予算は、使用目的が限られている紐付き予算なのです。ですから突発的に何かやりたいと思っても出来ないというのが現状なのです。

私は「先住民族サミット」アイヌモシリ2008の統括代表を務めました。実行委員会へは、準備委員会から実行委員会に移行する時に私は加わりました。一番初めは北海道大学の小野有五先生と事務局長の結城幸司さんの二人が、「G8 市民サミット市民フォーラム北海道」の中で「先住民族サミット」を開催しようとの提案がなされました。それがきっかけとなって2年前(2007年)の12月6日に「先住民族サミット実行委員会設立総会」を開き、その場で共同代表6人が選出され、さらに役員が正式に決まりました。ですから2007年の12月6日が実質的なスタートとなり、

2008年の7月1日までは半年ちょっとしかなかったのです。その半年の中で何をやらなければいけないか。まず外国から招聘するメンバーを決めなければいけない。そのための飛行機の手配をしなければいけない。宿の手配をしなければいけない。会場の手配をしなければいけない。『資料集』を作らなければいけない。それをなんと半年間でほんとにやったのです。これが当日お配りした、というか有料で販売したのですが、『「先住民族サミット」アイヌモシリ2008』という資料集を作りました。この資料集作りも“突貫工事”でやったのです。編集長は北海道大学教授の小野有五先生、先生に中心となって作っていただきました。外国から頂いた英語の資料も日本語に訳して資料集に掲載しております。この資料集には英語版もあります。

公の予算、例えば財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構に「国際会議を開くので旅費を出してください」と助成申請し、地球環境財団などへも助成申請を出しました。それらの申請はことごとく外れました。財団法人札幌国際プラザから15万円もらっただけです。結果的には、これらの申請は外れた方が良かったのです。お金を財団法人などからもらっちゃうと、あまりお金の大事さや大切さを考えずにぼんと使っちゃうわけです。

お金がもらえなかったが為にどうなったかというと、実際には9百何十万というお金を集めることが出来ました。まず、オノ・ヨーコさんジョン・レノンの奥さんです。オノ・ヨーコさんは北海道大学の小野有五先生の従姉妹なのです。そういう関係で、多分小野有五さんが働きかけ1万ドルの寄

付を下さったのだと思います。株式会社アレフさんから私が直に交渉して100万円をいただきました。その他からは企業回りをして企業協賛金を獲得しました。企業では金額の大きいところでは30万円、10万円、5万円と獲得しました。もちろん我々の実行委員会の仲間が、東京の方でも企業回りして資金集めしてくれました。それとあと一人一口1000円という個人会員の賛同金というのがあるのですが、全国から賛同金を送っていただきました。あとTシャツの販売や資料集の販売を含めて、九百何十万を集めることが出来たのです。私もこんなにうまくいくとは自分では思っていませんでした。いませんでしたというのもちょうと無責任なような気がしますが(笑)。

私は共同代表6人のうちの1人なのです。確か私が統括代表という肩書きとなったのは5月末か6月くらいです。ですから『先住民族サミット アイヌモシリ2008』が開催される直前だったのです。それまでの組織体制は、共同代表が6人いて、外部からは「あなたたち共同代表6人いるが、最終的には誰が責任もつのか」というようなことを言われました。実は当実行委員会では、社団法人北海道ウタリ協会へ名義後援を依頼しました。社団法人北海道ウタリ協会はお金を出さなくてもいいから「後援」という文字を文書に入れさせてと再三頼んだのですが、結局事前のリーフレットにも社団法人北海道ウタリ協会「後援」とは載っていません。「G8サミット」開催直前の6月6日に「アイヌ民族を先住民族と求める決議」が国会で採択されてから、ようやく社団法人北海道ウタリ協会も名義後援をしてくれました。これは我々の名義後援依頼の

仕方も悪かったのかもしれませんが、社団法人北海道ウタリ協会は、『「先住民族サミット」アイヌモシリ 2008』の開催がこんなに大きな風を起こす国際会議になるとは想像していなかったのでしょうか。「アイヌ民族を含めて20人くらいの実行委員会でそんな国際会議ができるものか、とはなから馬鹿にしていた」のだと思います。

ところが実行委員会のメンバー全員がやる気になると、まあこれはやった人間でないと分からないものですが、何かをやろうとした時やっぱり結束します。みんなで知恵を出し合いながら、ゴールに向かって突き進みました。完全と言えなくとも、「この会議は成功させるんだ」と最後までみんなで信じてやっただけと言えます。それで私自身は、この『「先住民族サミット」アイヌモシリ 2008』を開催し、7月4日に音楽祭が終わった後に実行委員会のみんなですね、成功を祝いお互いに抱き合うというか、今は「ハグ」と言いますが、本当にサポーター一人ひとりと抱き合って喜び合い感激しました。

実は、私の父・萱野茂が1998年の7月に参議院議員を引退しました。参議院議員の任期は6年です。私の父は、1992年比例代表の候補として社会党の11番目にランクされました。1992年の参議院議員選挙では比例候補の次点となりました。2年後に当選した10人のうちの1人・松本英一さんが亡くなり、父・萱野茂が繰り上げ当選しました。ですから94年7月から98年の任期満了までの4年間、1期の6分の4を務めました。その時に、私は地元で第二秘書をやっていました。参議院から給料をもらって議員を補佐する仕事をし

ていました。

その当時私の父・萱野茂は、その1998年で引退すると表明しました。立候補の当時は社会党から出馬し、社会党が社民党へ変わり、ほとんどの議員が民主党に移りました。私の父・萱野茂は、その時は民主党の国会議員になっていました。「萱野茂引退の表明を受けた」民主党は、社団法人北海道ウタリ協会へ「萱野さんは1998年の任期満了で引退するが、萱野茂さんの後継者を誰か指名してください」と申し入れました。社団法人北海道ウタリ協会当時の笹村二郎理事長は「我々は指名しない」と言ったのです。その結果、萱野茂が現職の民主党議員のまま終わることになったのです。その間隙をぬって社民党北海道連合が私に白羽の矢をたてて、参議院議員の候補になってくれと来ました。当時の社民党は、今でもそんなに勢力はありませんが、当時北海道の社民党は存亡の危機に陥っているくらい弱小化していました。ほとんどの北海道選出の国会議員は民主党に移っていました。私もいろいろ考えて、ちょっと面白いじゃないかと思い、1998年7月の参議院議員北海道選挙区に立候補しました。北海道選挙区は当時定員が2名です。その定員2名のところに立候補して、一議席目は自民党、二議席目は民主党、3番目が紙智子さんという共産党の人で、50何万票とって落選しました。後の選挙で紙智子さんは参議院議員として活躍しています。4番目が小沢一郎さんの甥っ子が出ていましたが16万票。私が5番目で141,593票しか取れませんでした。

なぜこんな話をするかというと、私は選挙運動期間中にいろいろな人と握手をしまし

たが、「心から私が相手をお願いします」という気持ちになれなかったのです。しかし、この先住民族サミットの最終日のその音楽祭が終わってからサポーターや実行委員の仲間と抱き合って喜んだ時は、いやあその時は本当に嬉しかった。その時、実行委員の共同代表の一人である秋辺日出男さんに「自分は1998年の参議院議員選挙に出て落選し、もちろん悲しかったけど解放されたという気持ちになって、いろいろやってくれた選挙の後援会の人たちに対して本当の感謝の気持ちが起こらなかったけど、今回は違うよ、心の底から嬉しかった」と。私の本音を言ったのは、皆さんと彼にしか言っていませんが（笑）。参議院議員選挙に関しては関係者がいるとちょっとまずい部分があります。

『「先住民族サミット」アイヌモシリ2008』を終えた最終日は、喜びの気持ちと共に本当に達成感がありました。自分たちが「G8サミット」首脳たちに対して何か訴えたいと思い、外国から先住民族を呼び会議を開こうと考えたのです。それはお金もない、組織もない、ノウハウも持っていない。けれども、目的意識と会議を成功させるという希望さえ持ち続ければ出来ることを体験しました。これは多分市民運動をやっている人たちと共通することだと思えます。この「中部人類学懇話会」のみなさんも何かをやろうと思ってやり続ければ、絶対何かの成果を出せると思えます。

私が今回『「先住民族サミット」アイヌモシリ2008』の統括代表を務め、運動のうねりや事を起こすタイミングなどを肌で感じました。2007年9月に「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が国連で採

択され、2008年になっても日本国政府は全く具体的な動きをしていませんでした。しかし、「G8サミット」が7月の8～10日に行われる。そのタイミングに北海道で「G8サミット」を開催すれば、アイヌ民族が当然クローズアップされるはずだ、と。日本国政府もアイヌ民族をないがしろに出来ないだろうとある程度は読めてはいましたが、あの6月6日に「アイヌ民族を先住民族と求める決議」の両議院の全会一致による採択については予想していませんでした。これが日本政府のアイヌ民族に対する一番新しい動きであろうと言えます。この後に「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」が内閣府の下に設置され、社団法人北海道ウタリ協会加藤忠理事長もその一人の委員として、右有識者懇談会で会合を持ち政策に関する議論がなされております。「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」の内容については、『グループ・シサムを目指して』の会報に詳しく書かれておりますので、そちらを読んでいただければよろしいと思います。

レジメに従っていくつかお話ししたいと思います。アイヌモシリの歴史というところで、私の先祖の話をしたと思います。私の父方の曾祖父・トッカラムという人が1858（安政5年）年に厚岸場所へ強制労働で連れていかれました。その時の様子が松浦武四郎の『沙流日誌』の中に書かれております。私の父・萱野茂が書いた『アイヌの碑』（朝日新聞社）という本があり、その中で「私の祖父は和人の奴隷だった」という題で詳しく書かれております。この本は文庫版（朝日文庫）にもなっています。単行本は朝日新聞社から、文庫本は朝日文

庫から出ています。その内容を紹介させていただきます。この『アイヌの碑』の中には、トッカラムが12歳で厚岸場所に連れて行かれ、そのトッカラム少年は、朝早くから夜遅くまで魚場で働く人たち、すなわち労働者のまかないの仕事、食事を作る仕事をさせられていたそうです。トッカラムはその仕事に耐えかねて、自分の左手の人差し指を切り落としてしまいます。12歳の子どもですから、指一本落とせば大怪我で帰してもらえるかもしれないと考えた結果、わざと切り落としたのです。左手の人差し指の付け根から切り落としています。これは写真も残っており、左手の人差し指は付け根からないです。そのトッカラムは、自分で指を切り落としても返してもらえず、次に、毎日捕れる魚の中にフグが混じっていたようですが、そのフグの胆汁を絞って手と顔と足に塗ったそうです。するとまるで黄疸にでもなったような顔色になって、やっと解放されたという風に書かれています。ですから、このトッカラム少年はこういう奇策を講じて、生きながらえたために、その子ども、そして孫、曾孫と、私にも息子と娘がおりますから玄孫までいるわけです。私はトッカラムの曾孫にあたるわけです。私の父は孫に当たります。ですから、トッカラム、清太郎、萱野茂、私・萱野志朗という系譜になるわけです。そういうことが、かつて行われていたという事実は事実として知っていただきたいと思います。これはもちろん、明治以前の話ですから、江戸幕府が責任を取るのか、江戸幕府から大政奉還を経て明治政府となるわけですが、その明治政府がその責任を取るのか。その辺はわかりませんが、未だに日本政府は、

アイヌ民族に対して執ってきた過去の政策に対する総括をしていません。

今までも日本国政府は、いろいろな問題、例えば朝鮮半島の植民地化の問題または中国大陸の植民地化の問題、または水俣病の問題や従軍慰安婦の問題などにもきちっと対峙し解決していません。きちんと歴史を清算できていないのです。ですから、私は少なくとも日本国政府はアイヌ民族に対して執ってきた誤った政策に対する反省、または謝罪をしなければならないと考えます。しかし、日本国政府は金券に関わるとかメソツに関わると言っただけで絶対に謝りません。やはり悪いと気づいた時点で謝るべきなのです。それをなぜ日本政府は謝らないのか、と常日頃私は疑問に思っています。国家は一つの組織ですから、組織の中でトップが誰かというだけの問題だけであって、国家としてやるべきことはやらなければいけない、と思います。

ちょっと話がそれましたけれども、商場知行制という制度が発展して場所請負制度というものになっていきます。この商場知行制というのは、現在の北海道むかしは蝦夷地と呼ばれていましたが、蝦夷地では米が取れないわけです。松前藩は蝦夷地では米がとれない為、松前藩の家臣に対する給料、禄といいますが、禄を米で払うことが出来ないのです。それで考え出したのが家臣に「商場」を与えるという制度が商場知行制であり、それが発展し商人にある一定のお金（運上金）を納めさせて場所を運営させたのが場所請負制度と言います。先ほど私の父方の曾祖父の話をしてきましたが、曾祖父の頃は場所請負制度になっていたころの話です。

先ほどDVDの中で、北原次郎太さんという方が出ていました。白老のアイヌ民族博物館の学芸員です。彼は千葉大学で博士号を取っています。アイヌ民族出身で私が知っている範囲ですが、博士号を取ったのはまだ3人しかいません。1人は知里真志保さん、2人目はなんと私の父・萱野茂なのです。そして3人目が北原次郎太さん。現在、勉強している人は何人かいるので、そのうち博士号を取る人は出て来ると思いますが、私の父の学歴は小学校卒です。私も卒業している二風谷小学校という学校です。明治26年生まれの方の祖父・清太郎が卒業し、大正15年（1926年）生まれの父が卒業し、1958年生まれの子が卒業して、1988年生まれの子の私が103回目くらいの卒業生です。ですから4代にわたって卒業している小学校があります。父・萱野茂はその小学校しか卒業していませんが、総合大学院大学という大学があり、そこは国立の博物館または国立の大学などが共同で参加している大学ですが、そこの大学院大学へ私の父は「送りに関する研究」、送りというのは器物であったり、クマ送りであったり、人間の送りも含めてなんですけれども、「その送りに関する論文」を出したのです。その論文が通って博士号を取りました。学歴は小学校卒ですが、論文を出す時、学歴の証明証が必要なんです。二風谷小学校へ行き、卒業証明書を出してもらい、それを添付して論文を出しました。

そして3番目の北原次郎太さんは、イナウ（御幣・幣束）、イナウそれ自体は神様ではないのですが、神様にお祈りするときには捧げるものです。神道で言うと御幣のよう

なものです。神に捧げるもので、神にささげる時に使うイナウというものを研究して、彼も何博士かはちょっと確認していませんが、取っているのです。ですから、アイヌ民族の中で博士号を取得したのは3人、私の知っている範囲だけです。もしかするともっといるかも知れませんが。私の知っている範囲ですが、アイヌ民族出身者でまだ弁護士は一人もいません。お医者さんは、正式にアイヌ民族であると表明していないけれどもいるようです。アイヌ民族の血を引いているお医者さんはいるようです。私は名前しか知りませんが、苫小牧市で弁護士をしている人がいます。この弁護士は、白老町出身でアイヌ民族の義理の息子（奥さんの連れ子）なんです。ですからアイヌ民族の実子ではありませんが、アイヌの系統を継ぐ弁護士は一人います。自分はアイヌ民族だと言っている弁護士はまだいません。ですから今であれば、法科大学を出て試験を受ければ昔の司法試験よりは合格率が少し高くなったので、近い将来アイヌ民族出身の弁護士が出てくるかもしれません。

つい最近では、朝鮮大学校を卒業した方二人が、法科大学院を卒業して二人が司法試験に受かったと、それ以前にも一人受かっていたと新聞に出ていました。それ以前にも在日コリアンの人で受かったという人もいます。そういう意味ではアイヌ民族出身者の社会的進出というか、そういうのは少ないのが事実だと思います。大学教授もいるのかどうか、私にもちょっとわかりませんが、ただ公立学校の先生などはアイヌでも採用されていますので、例えば『「先住民族サミット」アイヌモシリ2008』の実行委員を当初してくださった清水先生と

いう方がいます。この方は高校の先生で、最後は高等養護学校の校長で退職した人です。ですからアイヌ民族の中にも教職に就いて校長にまでなった人もいるのです。そういう意味では、まだアイヌ民族が全体的にどの分野においてもいるというわけではないので、今後社会的進出を目指し、アイヌ民族の人権を保障するための様々な運動が必要だろうと思います。

私の場合は、「萱野茂二風谷アイヌ資料館」の館長を努めていますので、本州から



二風谷アイヌ資料館の野外展示（写真上下：稲村）



アイヌ資料館の屋内展示

たくさんの修学旅行生が資料館へ来た際に講話をする機会があります。中学校は仙台

市の学校の生徒さんや神戸市などからも修学旅行生がいらっしゃいます。そういう生徒さんたちにアイヌ民族の現状をきちんとお伝えする、というのが私の仕事だろうと考えています。事前に勉強してくる学校さんもあるので、ある程度の知識は持っていますが、やはり茅葺の家を見て、事前に勉強してこない学校の生徒さんの中には「復元した家屋群を見てアイヌの村だと勘違いする」ケースもあります。現在では、アイヌ民族はチセ（伝統的な家屋）には住んでおらず、一般的な家に住んでいる事を知らないということに問題があるのです。なぜ分からないかということ、学校教育の中で教えられていないからだろうと思います。ですから普通の義務教育を終えた人たちが、アイヌ民族が未だに弓と矢を持ってクマやシカをハンティングしていると考えているとするならば、これはもう誤った情報しか持っていないことになります。

話は飛びますが、先ほど話に出てきた秋辺日出男さんについてですが、彼とは私が30歳のころから親しく付き合いをさせていただいています。いろいろな面白い話を二人でするのですが、彼は阿寒湖畔で民芸品の売店を営んでいます。ある時、お客さんが「あなたは原住民ですか？」と質問してきたそうです。原住民、原住民という単語は、現在の日本語では未開の人という意味であるから、差別用語であるから使わない、ということで使いません。それで彼は、少し頓知を聞かせて「ところでお客

さん、ちょんまげと刀はどうしましたか」
(笑)と切り返したけれど、そのお客は言われた意味が分からなかったと。話としては本当に笑えますが。そのほかの質問としては「日本語は話せますか」というのもあるそうです。いずれにしろ、ちょっとからかって、「ちょんまげと刀はどうしましたか」と言われ、相手がそこで気付けばいいのですが、そう言われても分からない人もいます。それぐらいの時代に対する認識の差があるということをあえて伝えているのです。なんせ客商売ですから、お客さんを怒らせるわけにはいかないので、ちょっと頓知をきかせて切り返しているようですが、それを相手が理解できなかつたらどうすればいいのだろうと嘆いていました。

このように観光地でいろいろな民芸品を販売したり、踊りを披露したり、そしてガイドをしながら生活をしている人たちは実際にいるわけです。例えば白老のアイヌ民族博物館や阿寒湖畔にあるアイヌコタン(アイヌの村)ではアイヌの踊りなども披露しています。私が住んでいる平取町二風谷には平取町立二風谷アイヌ文化博物館とその他に「萱野茂二風谷アイヌ資料館」(私立)があります。もう一つ沙流川歴史館という施設があります。これは国立の建物で管理は平取町教育委員会に委託されて、入館料は無料で平取町教育委員会が管理しています。このように二風谷地区には文化的施設が3館もあります。二風谷地区の人口は約500人世帯数は180戸くらいです。こんなに狭い地域に文化施設が3つもある地域は平取町内の他の地域にもありません。また、北海道内の他の市町村にもありません。それがなぜできたかというとは私の

父萱野茂が、古くからアイヌの民具を収集し、1972年(昭和47年)に二風谷アイヌ文化資料館というのを発足させ、それから5年後に土地建物と展示資料のすべてを平取町に移管したのです。平取町にあげたのです。それから平取町が15年間運営していました。その後、二風谷ダムが二風谷地区に出来たことにより、ダム周辺対策整備事業というお金が国から出て、1992年(平成2年)に3億5千万円をかけて博物館の建物を作りました。そして、旧資料館から資料をすべて移し、平取町立二風谷アイヌ文化博物館として再スタートしました。この博物館は近代的な建物で展示スペースも広くなりました。私の父・萱野茂が15年前に土地・建物・展示資料を全てただで平取町へ移管したものでした。その資料館の土地は、使用目的を失ったので返してもらいましたが、建物はまだ耐用年数経っていないということでなんと200万円で買い戻したのです。その建物を再利用して新たに発足したのが萱野茂二風谷アイヌ資料館。1972年(昭和47年)に開館された時、二風谷アイヌ文化資料館という建物を再利用し作ったのが萱野茂二風谷アイヌ資料館です。

ちょっと面白い話をします。1992年(平成2年)に萱野茂アイヌ記念館(萱野茂二風谷アイヌ資料館の前身)と名付けて発足させました。そうすると「萱野茂さんはいつ亡くなったのですか」との問い合わせがくるようになりました。その時もちろん存命ですよ。これはまずいということで「萱野茂アイヌ記念館」はやめて、「二風谷アイヌ資料館」と改名しました。それと二風谷アイヌ文化博物館もあるし、紛らわし

いので「シシリムカアイヌ資料館」と改名したこともあります。シシリムカは沙流川のアイヌ語名なのです。そして現在は、萱野茂という名前はやはりネームバリューがありますから、これを頭につけて、「萱野茂二風谷アイヌ資料館」と名付け「文化」取りました。ところがそうすると面倒なことが起こるのです。例えば私が新聞に出るとします。『「先住民族サミット」アイヌモシリ2008』統括代表は、「萱野茂二風谷アイヌ資料館」館長・萱野志朗となると訳が分からなくなっちゃって(笑)、もう萱野茂を取ってしまえと、二風谷アイヌ資料館、館長萱野志朗と表記されます。「萱野茂二風谷アイヌ資料館」館長萱野志朗とかぎ括弧が付いていけばよいのですが。最近では記者が工夫して、萱野志朗二風谷アイヌ資料館館長と、正式名称で呼んでもらえないという、ちょっと困った問題もあります。

私はアイヌ文化を継承するために、資料館の収蔵品を毀損したりしないように管理、保存、展示をすると共に、アイヌ語の継承活動もやっています。金成マツさんという方、さきほどのDVDに出てきました。知里幸恵さんの叔母さんに当たる方で、アイヌ語の語り手なのです。その方が大正の終わりから昭和の始めにかけて、ユカラ(英雄叙事詩)という壮大な物語をローマ字で書き残しているのです。このユカラは日本語では英雄叙事詩と呼ばれています。その英雄叙事詩はアイヌ語でローマ字の筆記体で書き残しています。その原ノートは当資料館に所蔵されています。どういう経緯で当資料館が所蔵しているかという、金田一京助さんという方が金成マツさんにユカラを書いてくれとお願いして自分が送った

大学ノートにびっしり書いてもらったのです。30冊以上ありますが、当資料館の金庫に入れてあります。金庫にお金は入っていませんが、お金に代え難い貴重な文化財と言えるべき資料があります。しかし、この資料はまだ、国の重要有形文化財にも指定されていませんし、北海道の文化財にも指定されていないのです。これは行政の怠慢だなと思いますけれども、そういう貴重な資料があります。北海道教育委員会が毎年1冊ずつ大体200ページくらいのを、私の父が活着している間に28巻まで出して、2006年5月に父・萱野茂は亡くなりました。私の父が亡くなってもう年が明けましたから約3年になるのですけれども、その後は私と蓮池さんという方と二人でやって2巻出しています。今度、30巻目が出て、2009年の春に出るものは、私と蓮池さんともう一人北海学園大学の教授・切替さんの3人で1冊ずつ出して、15年プロジェクトで年3冊ずつ出し、45冊がでた時点で完成予定です。こういうプロジェクトが進んでいます。ですから「金成マツノート」というユカラの日本語への翻訳という仕事もしております。それはなかなか大変な作業ではありますが、後世にきちんと書物として残りますから重要な仕事だと思っています。

今日は、本題からそれてはいますが、私の思いをみなさんにお話して、今回の『「先住民族サミット」アイヌモシリ2008』の報告に代えさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

■講演者プロフィール

萱野志朗 (KAYANO Shiro) 「萱野茂二風谷アイヌ資料館」館長

北海道平取町二風谷生まれ。「萱野茂二風谷アイヌ資料館」館長。1981年亜細亜大学法学部卒業。大手広告会社へ勤務ののち1988年より二風谷アイヌ語教室事務局員、1992年より同教室事務局長。1990年9月、佛教大学・通信教育部の博物館学芸員課程を修了し、学芸員の視角を獲得。1992年より「萱野茂二風谷アイヌ資料館」副館長・学芸員。1994～1998年、参議院議員萱野茂の公設秘書（第二秘書）、2000～2006年、平取町二風谷アイヌ語教室・子どもの部の講師、2007～2008年、S T Vラジオの「アイヌ語ラジオ講座」の講師を務める。「先住民族サミット」の統括代表を務める。



中部人類学談話会ミニ・シンポジウムにて。右は本多正也氏。